



兵庫県立歴史博物館特別展「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる」を観て（〈特集Ⅱ〉同時代史としての震災展示：兵庫県立歴史博物館特別展を通して）

松岡，弘之

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:114-116

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505418>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505418>



兵庫県立歴史博物館特別展

「阪神・淡路大震災を伝える・知らせる」を観て

松岡 弘之

展示を担当された学芸員の吉原大志さんが、白地が印象的な招待券を届けてくださったのは、二〇二五年一月に神戸大学で開催された全国史料ネット研究交流集会のことだった。阪神・淡路大震災から三〇年を間際に控えた時期で、神戸大学附属図書館をはじめとしてひろく兵庫県内での関連する催しに多くの方が足を運ばれたのだろうと思う。ただ、あらかじめ断りせねばならないが、私はそれらをほとんど観ることができていない。たまたま見学した尼崎市立歴史博物館では、過去の災害とあわせて震災に関する公文書も展示していた。基礎自治体の展示ならば市民に身近な地域の被災経験を語りかけることもできよう。県の施設として、阪神地域ではなく姫路におかれた歴史博物館が「情報と通信の一九九〇年代」を震災の展示のテーマとして据えたことにはどのような意図が込められているのだろうか、などと思ったりしているうちに、実際に観覧することができた

のは、会期末も迫る三月上旬の雨まじりの日だった。その時のメモと図録をもとに、展示を観て考えたことを少しだけ述べる。

この展示は、①「情報と通信の一九九〇年代」、②「被災地を伝える」、③「必要な情報を伝える」、④「体験を伝える」と名付けられた四つの部分からなる。①は一九九〇年代が情報通信環境の変革期を迎えていたこと、県内でも国際化が進展していたことを説明するプロローグとしておかれる。それを踏まえて、②は新聞社・放送局といった報道機関による震災以後の情報発信活動、③は被災地におけるさまざまなボランティア活動のなかで作られた膨大な数のミニコミ、④では震災体験の継承に向けた取り組み、をそれぞれ主題とする。②の展示では報道各社が駆使した機器や、実際に刷り出された紙面などのモノ資料が少なくないが、ミニコミの紙面を埋めつくした③では文字

量に圧倒され、途端に歩みが遅くなってしまった。

まったく個人的な経験にすぎないが、一九九五年に岡山大学に入学した私は長期の休みになると神戸市長田区を拠点に活動していたあるボランティア団体を訪ねていた。全国からやって来た学生たちとプレハブの事務所に寝泊まりしながら、市営住宅の单身高齢者の訪問活動を続けていたのは、一九九七年頃までのことではなかったかと思う。とはいえ、私はふだんは神戸から遠く離れた町に暮らす学生で、町の人々や仲間たちとたまの再会を楽しんでいたにすぎず、自分が関わる活動の行き先を考える視点も責任もまるでちあわせていなかった。やがて私は自分の課題なるものに出会った気がして、少しずつ長田が遠くなっていくのだが、はじめもつけないまま仲間のもとからフェードアウトしていったような後ろめたさが今も残る。そして団体が長田からの撤退を決めたとき、現場にとどまり地域の課題に関わっていくことを選んだ仲間の決意と覚悟に襟を正されたことや、センチティブな記録が処分されたということを聞いたときもリーダーの心労からすればそれも止むを得ないことだという気持ちのほうが勝ったことなどが次々と思い起こされてきた。

当時の私たちの活動は、震災を契機としてひろく知られるようになった「孤独死」をどう防ぐか、という文脈に位置づけら

れるものなのかもしれない。災害はその社会の最も弱い部分をうつといわれたなかで、夥しい数のミニコミを眺めていると当時の自分にとって象徴的な存在であるかのように見えた現場も、実は震災のごく一部にすぎなかったのだということに気づかされる。隣の団体にはエフエムわいわいでコーナーを持っている人がいるらしいと聞いていたが、このコミュニティFMが①の冒頭で提示された国際化のなから生まれ市民に必要な情報を届けていたことを当時しつかりと認識することができていなかったように。

展示は②報道機関—③市民団体—④個人といった主体ごとに章を分け、「伝える・知らせる」というタイトルのとおり情報を発信していく側の営みにそくしたものととして構成される。とはいえ、それぞれの言論空間が並列的に存在したわけでもない。①で提示された国際化が、③の終わりの部分でわいわいの設立にたどりついたことでテーマとして一貫しているようにも思われる反面、③であまた取り上げられたミニコミの世界がそうしたまとめで収斂できるものなのだろうか、震災とはこの社会に何を突きつけていたのだろうかと考え込んでしまう。たとえば神戸空港の設置問題を報道はどう伝えたか、それらの交錯として描くことで個々の点がどのように結びつき全体を形づくることになったのかをたどるような気もした。展示のチケッ

トや④で写真が紹介された大木本美通さんはテレビ局にお勤めであったという。新聞であれテレビやラジオであれ災害を伝えるのは一人の生身の人間であり、それぞれの現場に立った人々が一変した風景にレンズを向け、大切な人を亡くした人々に取材をする葛藤はいかばかりであつたろう。そして、大木さんはどのような思いで神戸空港建設反対のデモにレンズを向けられていたのだろうか。

それにしても、情報通信技術が今日のような発展を遂げているとは、大学から初めてメールアドレスなるものを付与されたばかりの当時の私には全く想像することもできなかった。携帯電話も持たなかった若者たちが、今やすっかりおじさんおばさんとなって再会できたこともSNSの恩恵にほかならないのだが、「報道が伝えない真実」なるものがインターネットを席卷し、同じ意見ばかりに接することが人々の分断を深めてしまうことは、兵庫の人々だけの問題ではない。かつての流言飛語がAIで生成されたフェイクニュースに置き換わることは悪意の伝播としては共通するのかもしれないが、一方で手作りの小さな雑誌媒体がZINEとして注目されているとも聞く。情報・通信の可能性と危険性とは浮き彫りになるなかで、当時のミニコミが伝えた多声的な市民社会から何を受け取ればよいか。

そうしたことを考えていると、展示が焦点化した「伝える」

ことだけでなく、それが受け止め手に「伝わる」という側面からも考えるべきことがらが潜んでいるように思われた。そして、この展示の一部を作成された神戸大学の学生のみなさんにそれぞれパネルの解説に結実した過程で考えられたことをもって聞いてみたくなった。それは震災当時まだ生まれていなかった学生さんに何が「伝わり」、それをどう「伝える」という努力の軌跡だからでもある。

展示を見ながら、震災と長田区での経験を歴史にすることができていない自分自身の未熟さをひしひしと感じるとともに、さまざまな資料の保存に取り組んでこられた多くの所蔵者の思いや力量を強く感じた。そして、神戸での経験を自分自身の課題や持ち場のなかでどう伝えていくことができるかという宿題をもらった展示でもあった。企画に携わられたすべての方々に敬意を表したい。